

出題ノート29 (英語)

小樽商科大学言語センター教授 高 井 收

はじめに

大学入試センターの仕事を考えるのも、本当にしばらくぶりです。過去の記憶をたどってみるものの余り確かではないかもしれないが当時の手帳などを見て、大変だった2年間を少しずつ思い出してみよう。平成14年の夏も過ぎた頃に1本の電話をK先生から頂いた。それまで、お名前は存じ上げていたが、さしたる面識もなかったのが、内心大変驚いた。最初、「お子さんはいらっしゃるんですか」とか、「最近、長期出張の予定はありますか」との質問で、率直に「子供もいませんし、長期出張の予定も今のところございません」とお答えした。その時は「何の話だろうか」と少なからず疑問に思ったが、守秘義務が徹底しているセンター業務であるが故だったのだと、今なら理解できる。そして、大学入試センター試験問題作成委員の依頼を受け、まさに、私にとっては「晴天の霹靂」であった。私の専門が英語教育であるからだけではないが、以前から、大学入試センター試験については興味もあ

り、委員のお声をかけていただけるとは本当に光栄に思った。しかし、次のK先生からの電話で、1年目は副部長として、そして、2年目は部会長として働くことになるかもしれないとのことで、私に務まるのかと非常に心配になった。先の電話で一旦お引き受けしてから、断るわけにも行かず、あまり、事情がつかめないまま業務に携わるようになった。

私自身それまで全く知らなかったからお引き受けできたのかも知れないが、今、振り返ってみると大変な事だと改めて感じさせられる。センター試験に関する運営、企画、広報、その他願書受付などの事務から、問題作成、各大学の過去に出した問題や、高等学校で使用されている教科書の内容調査から、他の教科との素材の重複調査、それに、他の組織による問題の点検、及び意見交換、そして、得点の分析調査など多くの人たちが携わり、その年度のセンター試験が出来上がってゆく。外国語は毎年、約50万人の受験生が試験を受けるわけで、その重要な

業務である問題作成は受験者の学力を適正・的確に評価できるようにベストを尽くさなければならない。英語の問題作成は高等学校学習指導要領の目標・内容に沿って実践的コミュニケーション能力の達成度を測るのを目標としている。コミュニケーション能力を語彙や、文法だけでなく、社会言語学的に見て適切な表現かどうか、また、談話的側面や方略的側面も考慮に入れ、多角的に測らなければならない。取り上げる題材は高等学校の生徒を中心とする受験者にとって身近で一般的なものを選ぶことになっている。難易度は平均点60%を目標として問題は作成されるのである。そして、多くの受験者のことを考えると、ミスの許されないこと以上に、プレッシャーの強い業務であった。こうして考えてみると、2003年4月からの2年間は私にとっていろいろな意味で勉強をさせていただき、日を追って磨かれてゆく自分を感じることができた期間のようであったと思う。そして、その間、副部長と部長の任務を無事務めることが出来たのも、作題委員の皆様の暖かい協力体制と責任感、そして、事務方の並々ならぬサポートのおかげであると感謝している。

英語部会の作業について感じたこと

英語問題作成委員は毎年度初めにそ

の、約半数が入れ替えとなるが、英語のネイティブ・スピーカーを含め、約20人で構成されている。部長及び副部長は本部や、他の組織との打ち合わせ会議で時間がとられることもあり、英語部会ではモデレーターが部長・副部長の他に1名選ばれ、討論の議長として重要な役割を果たす。問題を検討する中、部長が議長としてではなく、全体を調整し、まとめてゆくにはこの方法はとても良いと感じた。1年後自分が部長になったとき、その年度に担当されたモデレーターのY先生のおかげで、部長としての仕事が順調に運び、本当に感謝している。問題作成では、音声に関する問題、文法・語彙の問題、文章構成法に関する問題などそれぞれグループに分かれ、素材を持ち寄り、過去の問題やある特定の教科書の内容と重複していないかなど調査し、文章や、レイアウトがセンターの規定に適しているかとか、受験者にとって難易度なども含め適切かどうかまで議論をし、全体で確認して行く方式がとられている。問題案が出来上がってくると、全員で読み合わせを行い、さらに入念にチェックされ、次第に良い問題へと変化して行く。こうなると、各グループが最初に持ち寄った素材の姿がどんなのだったか全く知るすべも無い程、変身してしまっ

いるのが実情である。4月の時点では、その年度の1月に実施される、もうほとんど完成間近いセンター試験「英語」の問題について、ミスの無いように何度も何度も論議される。

私は、最初の部会で部長から紹介され、委員の皆さんから副部長として承認を頂いた。初回の部会に参加して驚いたのは、各委員にセンター試験問題作成に対する非常に強いモチベーションがあり、いやいや来ている先生は1人もいないということであった。自分の本務校でも入試業務を行うが、全く雰囲気が違う。参加している委員は言語学あるいは英文学などの専門家であり、問題に関して疑問がある場合には少しの妥協も許さず英語での議論が白熱した。事前に、ネイティブ・スピーカーを交えた英語を使っての議論のことは聞いていたので、それは承知の上であったが、広範囲にわたる専門的な内容を細部にわたって英語で議論していくことは、今まで自分の大学においても余り経験してこなかったので本当に良い意味で刺激になった。

センターでの英語部会の作業はその年度の入試が終わるまで、4月から始まり、十数回を重ね、1回の作業に3、4日かかる。私のように地方（札幌）から出てゆくと前日に出発しなければならず、毎月1週間ずつ本務校の授業

を休まなければならなくなる。最初は余り気にしていなかったが、度重なる、学生からも「先生、どうしてそんなに休講があるのですか」と聞かれかねない。センターの仕事は守秘義務が徹底していて、同僚たりとも出張先を明かすことができずに、本務校で理解してもらうには大変苦労した。7月頃になると、次年度の新しい委員を探すのも副部長の仕事であるが、お願いの電話をするが、事情が分かると断られる場合が多くなった。しかし、自分の体験から考えれば無理も無いことかもしれないとは思ったが、人探しがこれほど難しいものかと考えさせられた。とにもかくにも、1年目は部長のK先生、モデレーターのM先生、そして、先輩委員のおかげで何とか無事に終えることができた。その年度の最後の部会では、予行演習として、私が部長を務めることになり、それこそ手取り足取りで教えてもらった感じがする。最後の日には入れ替わって出て行かれる先輩委員に、後に残る1年目の委員から、1年間の感謝の意を込めて、小さい花束を贈った時の、先輩方の笑顔がいまだに忘れられない。

毎月の英語部会では最終日の前日にその月に誕生日を迎える委員の誕生パーティーを兼ねて、夕食会を催している。問題作成の各グループが交代で幹事を務め、センター近郊にあるレスト

ランを予約するのだが、毎回違った国の料理が楽しめるように工夫されている。しかし、一度行った所でも、委員の間で人気があれば、その要望も聞き入れられるようになっていく。私のように地方から来ている人間にとっては、渋谷あたりの珍しいレストランに連れて行ってもらえるだけで、感激していたが、この夕食会は通常の部会運営にも大変大切な役目をしていただいていると思われる。2年目に自分が部会長になり、全体をまとめてゆかねばならぬ立場におかれたとき、部会の委員の皆さんの率直な意見を聞くことが一番大切になる。部会において問題作成に関する討論をするにも、お互い同士の気心が知れている場合と、そうでない場合は、なかなか、率直な意見も出てこない。まして、ここに参加されている先生方はそれぞれの分野で一流の専門家ばかりである。一度意見が食い違つとなかなか妥協の線を見つけるのも大変だし、下手をすると、感情的なしこりを残すことにもなりかねない。センター試験問題作成はただでさえ大変なストレスを感じる仕事であるので、部会長としては、なるだけ楽しい雰囲気の中で、また、次回の部会に来る楽しみを委員の皆さんに持っていただきたい、少なくとも、その次に来るときに足が重く感じられないようにと心を砕いている毎日だった。でも、この毎回

の懇親会のおかげで、日中どんなに論を戦わせても夕方にはエスニックな料理を囲み皆で和気藹々と仲間意識で盛り上がる。程よくアルコールも回ると昼間の部会では聞けない趣味の話や、経験話など同僚の素顔が見えてくる。2次会には皆でジャズを聴きに出かけた時もあり、カラオケに行ったときもあった。私はできるだけこうした会に出席し、皆さんとの時間を大切にしようと思ったが、年齢的なこともありさすがに2次会は毎回参加というわけにはゆかず、その次の日の業務に備え、ホテルで早く休むことになった。

2年目に入り、2006年度からリスニングが導入されることに伴い、その準備をしなければならなくなった。それまでの英語部会の他に、リスニング部会が作られることになり、今まで一緒に働いてきた貴重な人材であるT先生が居なくなることに大変戸惑いを感じたが、リスニング部会とは常にこれから連絡を取っていかねばならないことを考えると致し方が無いとも思った。実際、それ以後の業務において、会議その他、問題重複調査・確認作業など今までよりも忙しさは増したが、英語部会とリスニング部会はしっかりした協力体制を持つことができ、これも、T先生のお人柄とご尽力のおかげだと感謝している。リスニングが導入されれば、これまで、いろんな方面から批

判されていた音声問題をペーパーテストで測る問題が少しは解決されるであろうと考えられる。しかし、高等学校関係者からの声によると今後も、発音問題の語強勢や文強勢の問題は、高等学校での英語の授業で生徒が知っていなければならないことで、従来の形式を残しておいて欲しいという意見もある。テストの弁別性から考えるとこれまでの試験結果を見る限り、あまり有効ではないようであるが、高等学校での基礎的学習の達成度を測るという目的からすれば、残しておいて良いようにも感じる。しかし、これからリスニングがセンター試験に導入され、それに伴い、高等学校の現場で、オーラルコミュニケーションの授業にも工夫・改善されてゆくことだと考えられ、良い意味でリスニングテスト導入との相乗効果が期待される。

問題作成の作業を進めてゆく中で、センターの方針としてセンター試験の平均点を60%程度にするという大きな課題がある。2004年度は65.05%であったが、最近英語の平均点が60%を超えることが多く、他の組織の教育研究団体から、少し易しすぎるという批判の声も聞かれていた。発音に関する問題は語強勢、談話において発話の意図に即した音調核の識別を試す問題であるが、基本的な規則を把握しておけば、機械的に処理できるのではないかと

う批判も聞いているので、形式を変更するかどうかの問題から議論し、素材作りにも大変な工夫をしていただき、何度も推敲と議論を繰り返してきた。リスニング問題導入の過渡期となったこの年度では、ある意味で一番大変なところであったのではないかと思われる。大変といえば、完成間近になってから、グラフがある高等学校の教科書に載っているものとそっくりであることに気がついた。その間はグラフとともに提示した英文テキストを読み、情報を総合的に理解させることで英語の力を問うている。センターの協力で高等学校の教科書で使われている語彙のデータベースは提供されているが、その内容までは教科書を一冊ずつ見てゆかねばならない。教科書の内容調査は問題作成の事前に行われるが、こうして常に気にかけていなければ細かいところまで発見できないのが実情であろうかと思われる。このときは、その間はすべて入れ替えし、もう一度初めからやり直した覚えがある。これ以後、事務の方々にもご協力を得て、教科書の内容に関するデータベースが作られるようになり、教科書の内容調査もだんだん便利になることだと思う。

ネイティブ・スピーカーは外国語である英語の問題作成に大変大きな助けとなる。特に、英語の実践的コミュニケーション能力を測る目的を達成する

には言語としての英語と社会言語学的な側面の文化的に適切な言語の使用ということも考えてゆかねばならない。英語部会には自分の専門分野を有し、少なくとも英国出身の委員と米国出身の委員が参加していて、時折、両文化での英語の発音、表現、もしくは句読点などの相違について、それぞれの分野から事細かに議論が沸騰することがある。部長としては、限られた時間ではあるが、なるべく、全員が納得するまで議論を尽くしていただくのが役目であるが、妥当線を見つけ提案してゆかねば会が進行してゆかない。実際に使用されている言語は割り切れない点が多いのも事実であるが、あまり、特定文化に偏りすぎて、日本の高等学校の生徒が必ず知っておかなければならない基本的な問題を見逃してしまっただけでは何にもならない。しかし、考えてみると、今まで海外に出たことも無い高等学校の生徒に英米の実践コミュニケーション能力を問うのはいかがかと考えることもある。やはり、国際語としての英語コミュニケーション能力を測るべきであり、日本の高等学校の生徒が持っている文化圏の中での実践コミュニケーション能力を問うべきであると個人的には考える。センター試験で出される英語の問題の多くは英米などの場面設定が多く使われる。例えば、2005年度の本試験の天気図の問題は架

空ではあるが、英米文化の場面設定が行われている。現在、高等学校の英語の教科書を見ても多くの場合、英米文化圏での話が多いので強いて大きな問題ではないのかも知れないが、これからは多文化とのコミュニケーションに使われる国際語としての英語を考えていく必要があるのではないと思われる。国際語としての英語コミュニケーション能力は何かという基本的な問題を解決し、高等学校の生徒に期待すべき実践コミュニケーション能力とは何かを具体化してゆくことが望まれる。

センター試験実施、そしてその後

本当に長い期間にわたって、センターの方々、各種点検委員の方々に支えられながら、英語部会の委員が一丸となって作成してきたセンター試験の問題が、50万人もの受験者の眼前にさらされ、世間の評価を受けるのが全国一斉のセンター試験である。試験当日は、本試験では問題作成委員全員が部会室に8時前には集合し、もう一度、全員で試験を解いてみて、間違いの無いことを確かめる。試験が始まり、過度の緊張感が部屋全体に広がり、全国からの質問などに対応するため心の準備を整える。廊下の外に急ぎ足の音が聞こえ、ドアをノックする音と同時にドアが開けられ、最初の質問が届いた時には、約20名いる委員の顔が一斉に部会

長に向く、立ち上がって心配そうに見える先生もいる。2005年度の試験では数回このようなことが続き、その度に緊張度が頂点に達した。しかし、訂正を要する質問ではなく、試験時間終了とともに、安堵感に包まれていった。試験当日は部会長・副部会長・モデレーターをはじめ、各グループの責任者が夜8時まで待機する。みんな、受験者や予備校・報道機関の対応が気になり、インターネットで試験問題に対するコメントや得点予想を見つけ、納得したり、疑問を投げかけたりした。特に難易度に関するコメントはその年度の試験の平均点にかかわってくる。センターで目標として定めた平均点60%が達成されるかどうか大きな関心事のひとつとなっている。幸い、2005年度の本試験の平均点は58.09%とこれまでのように易しすぎるといふ批判も受けずに終わって、皆でホッとした。しかし、その後、1か月余りにわたってまだ数件質問が続いた。質問の内容は重複しながらも、その多くは部会で論議・紛糾したものであった。時には、本務校に戻って授業をしている最中にもセンターから電話が入り、しばらくの間は気の休まる日が無かったように記憶しているが、これも部会長の務めなのだろう。

1月に最大の山であるその年度のセンター試験が終わり、1か月ぐら

れば、また、他の評価組織から出された意見・感想などを踏まえ、次年度に実施されるセンター試験の問題作りの続きの作業が始まる。

むすびにかえて

2年間のセンターで経験した事柄を思い出しながら記述させていただいた。部会長を仰せつかった当初は、本務校の仕事やら、センターでの業務で、一時はどうなることやらと心配し、带状疱疹を患った時期もあったが、なんとか任務を遂行することができた。しかし、多忙きわまる中でも、部会の仕事が達成感のある、有意義な集まりで、自分自身が部会の回数を追うごとにいろんな面で成長してゆくのが感じられた。3日間の部会の中日に行われた懇親会では、業務とは離れた話題に花が咲き、委員の先生方の苦労話や経験談をお聞きすることができ、より親密な関係を保つことができた。任を離れても、英語部会では毎年の学会の折に、同窓会が開かれる。これからも同期の桜に再開する機会がもてそうで、学会出席も楽しみが増えそうだ。

最後に、私が任期中の平成15年4月から平成17年3月の2年間、無事に任務を務めることができたのは、英語部会委員の皆様のご指導とご協力、本務校の先生方、大学入試センターの英語担当事務の方々、各種点検委員の方々、

大学入試センター職員の皆様のご協力の賜物であり、深く感謝申し上げます。今後、大学入試センターのますますの発展を祈念して筆をおかせていただく。

